

聖書:第一列王記19章15～21節

説教:さあ、帰って行け

はじめに

イスラエルが北と南に分裂したあと、北王国イスラエルの七代目の王となったアハブは主を捨て、妻イゼベルの信じていたバアルと呼ばれる神々を拝むようになります。神は預言者エリヤを何度もアハブの所に遣わし警告するのですが、いっこうに悔い改めません。いろいろなことがあってエリヤが奉仕に疲れ切ったとき、神はエリヤをホレブの山の上に招き、「エリヤよ、ここで何をしているのか」とかすかな細い声で問いかけた。それが前回までのあらすじでした。

1 エリヤの悩み

1) なぜ神はさばかないのか

エリヤは熱心にイスラエルの神である主に仕えてきた人でした。それなのになぜ彼は死にたいと口から漏らすまで気落ちしてしまうのか。もう一度そこから振り返っていきます。

エリヤはいのちをかけながらアハブに対して悔い改めるよう何度も厳しいみことばを語り、あるときはたった一人でバアルの預言者とも戦いました。ところが物事が良くならない。アハブもイゼベルも悔い改めるどころか、ますますひどいことをする。いや、それだけならまだ我慢できたかもしれない。神は悔い改めもしないアハブに雨を降らせたばかりでなく、アハブが大雨に降り込まれて帰り道に迷わないように、エリヤがわざわざ先頭に立って走るようにと主から言われる。その挙げ句の果てに、イゼベルから脅迫状が送られる。いったい自分は何のために苦労してきたのか。非常に空しくなってしまった。主は悪いことをしているアハブとイゼベルをさばかないのか。そんな疑問から彼は燃え尽き症候群になってしまいます。

2) 主のさばきを見ないまま天に上げられる

そのようなエリヤの悩みに神はどのように答えたか。順序は逆になりますがまず18節。「しかし、わたしはイスラエルの中に七千人を残している。これらの者はみな、バアルに膝をかがめず、バアルに口づけしなかった者たちである。」あなたはひとりぼっちではない。あなたには仲間がいる。そう言って励ましながら15から17節を語る。「さあ、ダマスコの荒野へ帰って行け。そこに行き、ハザエルに油を注いで、アラムの王とせよ。また、ニ

ムシの子エフーに油を注いで、イスラエルの王とせよ。また、アベル・メホラ出身のシャファテの子エリシャに油を注いで、あなたに代わる預言者とせよ。ハザエルの剣を逃れる者をエフーが殺し、エフーの剣を逃れる者をエリシャが殺す。」

エリヤはこれを聞いて、19節以降にあるようにエリシャを捜しにでかけていく。神のさばきは本当にあるのかと疑って悩んでいたエリヤが、なぜ出かけて行くのか。主が必ずさばきをなさると確信したからです。どこにそんなメッセージがあるのか。「ハザエルの剣を逃れる者をエフーが殺し、エフーの剣を逃れる者をエリシャが殺す。」これです。この意味についてはこの後見ることにして、ではエリヤは主のさばきを見ることができたのか。いいえ、彼は見ない。さばきを見ることなく、竜巻に乗って天に上げられていきます。普通なら、「あの人たちがさばきを受けて苦しむところ見るまでは死んでも死にきれない」と言いそうなところ。もちろんエリヤはそのようなことは言いません。主にゆだねます。たとえ目で見ることもなくても平安でいられた。「信仰者だから」でしょうか。でも彼は最初から信仰者だったはず。その一言でかたづけられない、何か事情がありそうです。そのことは最後に触れたいと思います。

2 主のさばきはどのように行われたのか

1) 疑問

さきほど15節から17節を読みました。このことばは説明をされないといったい何を言わんとしているのか、ほとんど理解できない。そもそもエリヤはイスラエルの人々の所へ遣わされてきた預言者です。ニムシの子エフーはイスラエルの人ですからわかるのですが、ところがダマスコに行けと言われる。それはアラムと呼ばれる外国の町です。なぜそこに行つてわざわざハザエルに油を注いで王とするのか。そしてもう一つ。「ハザエルの剣を逃れる者をエフーが殺し、エフーを逃れる者をエリシャが殺す。」この「ハザエルの剣を逃れる者」とは誰なのか。これもわからない。

2) アハブの子ヨラム (21章29節)

そこでまず「ハザエルの剣を逃れる者」とは誰のことかから見ます。このことが明らかにされていったのは、アハブが起こした一つの殺人事件がきっかけでした。アハブは自分の家の隣に広がる畑

が欲しくなり畑の持ち主に売って欲しいと交渉をして断られる。それでイゼベルは嘘の証言をさせて畑の持ち主にあらぬ罪をかぶせ、石で打ち殺し、強引に畑を手に入れる。これをご覧になっていた主は、「彼の子の時代に、彼の家にわがわいを下す」と語ります(21章29節)。そうしますと、「ハザエルの剣を逃れる者」とは誰であったか。答えはアハブの子で、その名はヨラム。そのヨラムはどうなったのか。そこで次にハザエルのことを見ます。

3) アラムの王ハザエル(第二列王記8章29節)

ハザエルはもともとベン・ハダドと呼ばれるアラム王の部下として働いていた。ところがあるときエリシャが彼に、「主は私に、あなたがアラムの王となると示されたのだ」と告げたところから自体が大きく動き出します。ハザエルはこれを聞いたときは、まさかそんなことはありえないと否定するのですが、次の日、自分の主人を殺して王の座を奪い取ってしまう。野心を抱いたハザエルは、やがて軍隊を整えて北王国と南王国の連合軍に戦いを挑み、その戦いでアハブの子ヨラムに深い傷を負わせます。致命傷にはなりませんでしたが、前線から退いて療養しなければならなくなります。これが「ハザエルの剣を逃れる者」が指している内容です。

4) イスラエルの王エフー(第二列王記9章3節)

次にエフーを見ます。エフーはアハブの子ヨラムに仕えていた将軍でしたが、エリシャが「主はあなたに油を注いでイスラエルの王とする」(9章3節)と語り自分の頭に油を注ぐのを見て、ヨラムを裏切る決心をします。それですぐに、傷を負って療養中だったヨラム王のところに走り、逃げるヨラムめがけて弓を引いたところ、心臓を貫いてヨラムは死んでしまいます。

5) イゼベルの最期

エフーによる追及の手はそこで終わらず、アハブの妻イゼベルにも向けられます。隠れていたイゼベルが窓から顔を出したのを見てエフーは、「その女を突き落とせ」と叫ぶとイゼベルのお付きの者が彼女を裏切って窓から突き落としイゼベルは悲惨な死を遂げます。こうして、「ハザエルの剣を逃れる者をエフーが殺す」という主のみことばが成就していきました。ハザエルもエフーもこの二人を王としたのはエリシャです。エリシャを通して、アハブの家の者にさばきが下されていきました。

3 主のさばきと救い

1) やがてのさばき(詩篇96篇13節)

血なまぐさい話ばかりでどこに恵みがあるのかと思う箇所です。でももう一度、エリヤが何に悩んでいたかに目を留めます。

私たちは時には、理不尽なことで苦しみを通ることがあります。助けてくださいと祈っても、大切な愛する家族や友人を失うことがあります。それでも私たちが信仰を捨てないのはなぜか。確かに詩篇96篇13節にこう書かれています。「主は必ず来られる。地をさばくために来られる。主は義をもって世界をその真実をもって諸国の民をさばかれる。」

いま見たとおり、エリヤは地上にいる間、主のさばきを見ることはありません。それでも平安でいられた。必ず主は約束どおりにさばきをしてくださる。それを信じていたからでした。

2) 救い

ではあれほど悩んでいたエリヤが、どうしてそこまで変えられたのでしょうか。ちょっと前までは、熱心に主に仕えても空回りばかりし、主のさばきを信じられず、死にたいとさえ思うようになったのです。どこかでエリヤが大きく変えられていったとしか思われぬ。それはいつであったのか。彼がホレブの山に登り、主のかすかな細い声を聞いたときです。あの御声を聞いたとき、神は確かにさばきをなさると確信した。でも、主のかすかな細い声がなぜさばきの確信とつながるのでしょう。

なぜ主はかすかな細い声で語るのか。前回も言いました。主が十字架におつきになるからです。十字架で苦しむとき、大きな声では語るなどできない。でも、なぜ主が苦しむのか。なぜ主は十字架におつきなるのか。神のさばきを受けられたからです。神は必ず罪をさばく。ある人はその証拠を見せて欲しいと言うでしょう。十字架を見てください。あれこそがさばきの証拠です。エリヤはそれを見た。それを見たので、さばきを確信できた。

でもよく考えるとおかしなことです。神である主がなぜ十字架で苦しむのでしょうか。苦しむべきなのは、あの悪い人、この悪い人ではないのか。もっと突き詰めていくなら、苦しむべきなのは他の誰でもない、この私だったのです。主は、あなたの罪の身代わりとなって苦しみました。なぜなら、私たち全員が罪人だからです。

もし神がご自分のひとり子である方を私たちのところに遣わしてくださらなかったなら、いったいどうなっていたらと思います。今日の箇所を読むとき、神のさばきの恐ろしさの前で震えるしかない。でも私たちはこのところを安心して読める。なぜですか。イエス・キリストと呼ばれる方が、私たちの身代わりとなって十字架の上でさばきをお受けになったなら。そして、この方が三日目に墓の穴からよみがえられたことで、信じる者には必ず永遠のいのちを与えるという約束を目に見えるようにしてくださったから。

そこでこのように言うことができます。もし神がこの世をさばかないというのなら、十字架に何の価値もありません。教会に来る意味もない。信仰など無駄なことです。しかし今日の箇所では主は言われる。主は必ず悪い者をさばいていく。私たちの目がさばきをみるのがなかったとしても、必ず主はさばく。神の御怒りから逃れるために、主は過越の血を流して与えてくださった。エリヤが主のかすかな細い声を聞いて、神のさばきを確信します。そして同時に、神は必ず私たちを十字架のもとで救ってくださる、そのことも確信しました。

主のめぐみに感謝します。